

取り憑き幽霊と社畜ちゃん

みなぎし

すい

【人物一覧表】

香椎 唯（6）（12）（18）（3

0）∴OL

逢沢 百合花（6）（12）（18）

（享年18）∴幽霊

時乃 神子（6）（12）（18）（

30）∴パパ活女子

佐々木 麗華（6）（18）（30）

∴刑事

佐藤タケシ（40）∴刑事

中島タクヤ（40）∴ヤクザ構成員

丸井太郎（55）∴丸井組組長

名木野恭平（8）（50）∴教師

名木野圭（6）（48）∴会社員

浅野陽太郎（48）∴会社員

生徒∴高校生

ヤクザ∴丸井組

○路地裏

路地裏付近に、パトカーが何台か停ま
っている。パトカーのサイレンが鳴っ
ている。

路地裏に倒れている女子大生。はだけ
た服で死んでいる。

佐々木麗華（30）「まただ！ 12年前の

百合花と同じ……」

麗華、拳を握る。

麗華「下衆野郎め！」

麗華、怒りの表情になる。

○（回想）公園

香椎唯（6）、麗華（6）、逢沢百合

花（6）、時乃神子（6）、ボールで

遊んでいる。

唯「えへへ！ 楽しいね！」

百合花「うん！」

麗華「うん」

神子「た、たのしいね」

4人、笑顔を向けあう。

唯「えへへ。一生友達だもんねーっ！」

唯N「そう。私たちは、永遠の友達。途切れない絆で結ばれてる、大親友だ」

唯、満面の笑みでにこにこしている。

（回想終わり）

○会社・オフィス

唯N「これは、私が親友の未練を探す物語」

唯（30）、目にクマがある気だるげな表情で、パソコンのキーボードを叩いて仕事している。百合花（享年18）、ふよふよ浮きながら唯にくつついている。

唯N「私には、つきまといってくる幽霊がいる。

名前は逢沢百合花」

サラリーマンA「あ、あの。ここはどのようなのでしょうか！」

若いサラリーマン、唯に資料を見せる。

唯、椅子を回転させてサラリーマンA

のほうを向く。

唯「ああ、ここはね」

T「香椎唯 逢沢百合花」

唯、資料を指さしながら説明する。

それを見た他のサラリーマンたちがぞくぞくと唯のもとにやってくる。

それら質問を次々とさばく唯。

課長「香椎、すごいな」

唯「あ、どうも……」

課長「そんな香椎に、このたび課長への昇進が決定した」

唯「え……私ヒラ……」

唯、呆然とした表情になる。

唯「はい、わかりました……」

気だるげな返事をする唯と、唯をじつと見つめる百合花。

唯M「まあいいや。明日ひさびさにみんなと会おうし……」

○ 高校・校門

校門前に、声を張って募金を呼びかけている女子生徒3人がいる。

唯「はい、これ」

唯、1万円札を箱に入れ、校門をくぐる。

女子生徒A「いつもありがとうございます！」

女子生徒B「やばすぎ……定期的に来る」

女子生徒C「あの幽霊ついてる人でしょ？」

卒業生らしいよ。やばく！ 男子に聞いたけど、いつも万札だって！」

○ 高校・中庭

唯、花壇を手入れしている。

唯N「私は、困ってる人を見捨てることができない」

○（回想）小学校周り

唯と百合花、大人たちと一緒にゴミ拾いをしている。

唯（12）「ねえ。なんで、百合花ってこん

なことしてるの？」

百合花（１２）「これやると、この人たちが
にこにこするんだよ！」

百合花、唯に向かってにこつと笑う。

唯「す、すごいね……！」

（回想終わり）

○高校・中庭

唯 N「あのときの百合花の顔があまりにも優
しかった。そこから、人助いで心が温まる
ことを知った。私は、困ってる人を見捨て
られなくなった」

唯、雑草を抜く。

女教師「あら、香椎さん。いつもありがとう
ね。はい、これ。逢沢さんも、ありがとう
ね」

女教師、唯に飴玉を渡す。百合花の頭
をなでるふりをする。

唯「どうも」

唯、かがみながら軽くお辞儀する。女

教師、立ち去る。

唯、袋を開けて飴玉を口に放り込む。

百合花「どうしたの？ そんな暗い顔してさく。そういう時はスマイルがいいんだよ！」

百合花、笑顔で唯の頬を触ろうとするが、指が頬を通り抜けてしまう。

百合花「（笑顔で）今日またうちら4人で会うんでしょ！」

唯N「百合花は、自身が学校にいる時もしくは幼馴染4人組には見える不思議な幽霊。学校ではちよつとした有名人だ」

唯、じょうろを持って花に水をやる

百合花、満面の笑みを唯に見せる。

百合花「ね。わたしの成仏なんて気にしないで絶対犯人探してね！」

唯「うん」

○高校・校門（夕方）

唯、校門をくぐろうとする。

男子生徒A「あ、香椎さんだ！ 幽霊の逢沢

さんもいるぜ！」

男子生徒B「まじか！ 握手してもらおうぜ
！」

生徒たちが、ぞくぞくと2人に駆け寄
ってくる。唯、生徒たちと握手する。
百合花、握手の動作をしていく。

唯「ふふっ」

唯、くすりと笑う。

○居酒屋・客席（夕方）

唯、麗華、神子（30）、同じ席に座
っている。百合花、唯にくつついてい
る。

T「佐々木麗華 時乃神子」

唯「みんな、きてくれてありがと……乾杯」

麗華「乾杯」

麗華、クールな表情で酒グラスを持つ。

神子「乾杯、だね……また、この4人で集ま
れて、うれしい」

神子、地雷系コスを着ている。全体的

にスローペースな話し方。

百合花「かんぱーい！」

3人、乾杯をする。百合花、乾杯のふりをする。

神子「百合花、相変わらず明るいね。唯、暗くなった……目にクマできてるけど、大丈夫そう？」

百合花「えへー！生前もそうだったからかな？」

麗華「百合花、若々しくて綺麗」

神子「麗華は、相変わらずクールで百合花には甘いね……唯と風紀委員で、生徒には厳しかったのに……」

神子、枝豆を食べる。

麗華「ふん」

麗華と神子の間の雰囲気がびりっとする。

百合花「あ、ねえねえ！唯の最近の話聞かせてよ！」

取り繕うように話題を帰る百合花。

唯「はあ。ねえみんな聞いてよ……課長なっちゃったあ。だる」

神子、酒を飲む。

唯、酒を飲んで机に突っ伏す。

神子「すごいじゃん……課長って、だめ、なの？」

唯「中間管理職って超めんどくさいの……はあ」

神子「大変、だったね……でも、あたしがいるから、大丈夫だよ」

麗華「神子。その地雷系の服装、まさかまだパパ活してるんじゃないでしょうね。やめなさいって言ったでしょ。トラブルに巻き込まれるかもしれない」

麗華、早口でまくしたてて神子を睨む。

神子「あ、あたしは唯のためにお金を稼いでるだけだもん……実家暮らしだから余裕あるし唯にお金を」

麗華「神子！」

麗華、机を叩いて怒鳴る。神子、びく

つとする。

麗華「なんで百合花が死んだか覚えてないの
！？」

麗華、叫ぶ。周りの客が麗華たちの方
を向く。

○（回想）高校・教室

先生「今日、逢沢百合花さんが殺されている
のが発見されました」

ざわざわする教室。

唯「百合花……百合花！ 百合花！」

麗華「う、ああ……百合花あ、百合花あ！」

神子「嘘だよね……嘘って言ってよ……！」

3人、ぼろぼろと涙を流して泣く。

（回想終わり）

○居酒屋・客席（夕方）

麗華「後からみんな知ったでしょ？ 百合花
はレイプされて殺された！ 犯人をこの手
で捕まえるために私は刑事になった！ 私

が百合花の無念を晴らすために……」

麗華の早口に、神子、びくつとする。

神子「あ、あたしだって、危険日とかの対策はしてるし……」

麗華「神子！もし犯罪に巻き込まれたらどうするわけ？まったく、神子が高校ん時からしょっぱかれなかったのが奇跡だよ」

百合花「まあまあ、そこらへんに」

言い合いになる麗華と神子を止める百合花。

百合花「みんな仲良くじゃないとやだよ！でも麗華、うちのためにありがとう」

唯「百合花の言う通りだよ」

麗華「はぁ」

麗華、ため息をつく。

百合花「みてみてー！」

百合花を見る3人。

百合花「どうもー！腹筋崩壊太郎です！」

百合花、お腹を見せてマツチヨポーズをする。

麗華「ぷっ、ふふっ……あはははっ！」

唯「ちょ、ちよつと面白い……きんに君じゃ
ん」

神子「ふふっ。それ、知ってる……まだ見て
る」

百合花「みんな会ってなくてもまだ見てるん
だ、ほんと仲いいねー！」

神子「唯が見てたから、みんな見たんだよね
……女の子なのに」

4人の間で笑いが起こる。

○墓地（夕方）

唯たち、逢沢家の墓の前に立っている。

唯、逢沢家の墓に水をかける。麗華、
花をお供えする。神子、水いりバケツ
を持っている。

麗華「で、まだ犯人の顔思い出せないの？」
百合花「うん」

※ ※ ※

（フラッシュ）

アタツシユケースを開く黒服と、それ
を見る黒服。

※ ※ ※

百合花「フードかぶってたからわかんない。

でも、なんかの取引だった気がする。どう
せ麻薬とかじゃない？ あー、たまたま寄

っただけだし場所は覚えてないなあ」

神子「犯人わかったら……成仏するのかな」

麗華「あ」

麗華、はっとする。

麗華「しまった。犯人捕まえることばっか考
えてて、そのこと考えてなかった……」

唯「忘れてたんだ……」

百合花「麗華、うちのことは気にせず犯人探
して！ お願い！ これからの人のために
も！」

麗華「……百合花の頼みなら」

少しくぐもった声で答える麗華。

麗華「百合花。何かあったら私を頼ってって
言ったのに、私がいちばん役に立てるのに、

どうして唯についでるの？ 私じゃ……だ
めだった？」

百合花「唯がいちばん仲良かったから、かな
？ 唯にだけついていけるみたいなんだよ
ね。なんでこうなってるか、うちは詳しく
はわかんない。まあ、こうして姿表してる
のも、うちの未練が関係してるんじゃない
かな」

麗華「そう……百合花がいいなら否定はしな
いよ……」

麗華、さびしそうにうつむく。

唯「こんな暗い私が言えたことじゃないけど
さ……麗華、無理しないで」

麗華「なにそれ。ほんと、言えたことじゃな
いね」

唯「ごめん……」

麗華「別に、謝らなくていいし」

百合花「それじゃ、みんなここでお別れだね
！ また会おうね！」

百合花、笑顔を向ける。

麗華「あ、神子。これ」

麗華、神子に小さなストラップを渡す。

麗華「胸のリボンにつけたらお似合いだよ。

取れないようにしっかりとつけてね」

神子「……あ、ありがとう……！」

○佐々木宅前（夜）

一軒家の前に立つ麗華。

麗華「ずっと百合花のことが好きだったのに

！ 百合花……私、どうすればいいかわか

なくなっちゃったよ！ 成仏するかもだ

なんて……私、百合花にいらなくなってほし

くない！」

麗華、ぼろぼろと涙を流す。

○（回想）高校・教室

同級生 A「麗華ってさ、真面目すぎるよね」

同級生 B「わかる。なんでも風紀風紀ってさ」

女子 3 人、麗華の目の前に威圧的に立

ちふさがる。

麗華（１８）「え」

同級生Ｃ「あんまさ、調子乗らないで」

女子たちから、そうだそうだコールが
起こる。唯、神子、心配そうに麗華を
見つめる。

百合花（１８）「そんなことないよ！ 麗華
は、学校をよくしたいって思ってるから。
みんなが大事だから委員長と風紀委員やつ
てるんだもんね！」

麗華たちの横から、底抜けに明るい百
合花の声。

同級生Ａ「う、わかったよ」

女子３人、麗華から離れていく。

麗華Ｎ「百合花の顔が、あまりにも明るかつ
た。だから、女子たちも私を責めなくなつ
た」

（回想終わり）

○佐々木宅前（夜）

麗華「百合花！ 百合花に告白しようと思っ

てたのに！ その前に死んじゃうなんて：

：うつ、う：：：

佐藤タケシ（40）「よう」

麗華「あ、こんばんは」

麗華、涙を拭く。

麗華 M 「やば、聞かれた？」

タケシ「お互い疲れるな、刑事。はいこれ」

タケシ、麗華にコーヒーを渡す。

麗華「あ、どうも」

麗華、軽く会釈して自宅に入る。タケシ、どこかに歩いていく。

○アパート（夜）

唯、階段をのぼる。百合花、唯にくつついている。

唯、鍵を開け中へ入る。

○アパート香椎宅・居間（夜）

唯、部屋の電気をつける。

部屋はかなり散らかっている。

百合花、部屋を飛び回る。

百合花「部屋片づけないの？」

唯「いいや、別に……めんどくさい」

唯、ソファに座ってリラックスした体勢になる。

インターホンが鳴る。

唯「はい」

唯、扉を開ける。目の前に神子が立っている。

唯「ん？ 何しに来たの？ さっき別れなかったっけ……」

神子「と、泊まっても、いい、かな？」

唯「ああそういう。いいよ、あがつて」

神子「あ、ありがとう……」

神子、靴を脱いで部屋にあがる。

唯「でも、もう寝るから」

神子「うん……それで、いいよ」

○同・寝室（夜）

唯と神子、同じベッドで同じ布団に入

って向かい合っている。百合花、唯にくつついている。

神子「お泊まり会、ひさしぶりだね……邪魔してごめんね、唯、疲れてるのに」

神子、申し訳なさそうな表情をする。

唯「ああ、気にしないで……」

神子「優しいね、唯」

唯「……そうかな」

百合花「おやすみー」

唯と百合花、眠りにつく。

しばらくして。

神子「唯……」

○（回想）小学校・教室

神子M「あたしは昔からとろかった。あと、顔がかわいって理由で、いじめられた」

神子（12）、女子たちにいじめられている。

唯（12）「こら！ やめろ！」

唯、叫ぶ。

女子たち、逃げていく。

唯「神子、大丈夫？」

神子M「かっこいい……」

（回想終わり）

○アパート香椎宅・寝室（夜）

神子、にやにや笑っている。

インターホンが鳴る。

神子「誰、だろ」

神子、立ち上がる。

○同・玄関（夜）

中島タクヤ（40）の声「宅配便です」

神子「あ、今あけます……」

神子、扉を開ける。

タクヤと男数人が立っている。

神子「え」

タクヤ「間近で見たら、写真通りの上玉だな

……連れていけ」

タクヤの指示で、神子、腕をつかまれ

る。

神子「い、いや、離して！ 離して！」

神子、抵抗する。タクヤ、ナイフを突きつける。

タクヤ「静かにしろ」

タクヤ、スタンガンを神子に食らわせる。神子、気絶。

○アパート前

男たち、神子を運んで車に乗せる。

タクヤ、車に乗る。車、発進する。

○アパート香椎宅・寝室（朝）

唯、ゆっくりとまぶたを開ける。

唯「あれ……神子、帰ったんだ。百合花、見てない？」

百合花「さあ、寝てた。でもさ、あんなに唯にくつついてた神子がそんな勝手に帰るか？ タイミング悪くない？」

唯「うーん……」

唯、時計を見る。

※ ※ ※

（フラッシュ）

居酒屋で話をしている唯たち。

※ ※ ※

唯「まさか」

唯、急いでベッドに置いているスマホを手に取る。

神子にメッセージを送る。

唯「あの神子が反応なし……」

スマホで電話をかける。

唯「だめだ」

○佐々木宅・居間（朝）

麗華、朝食を食べている。

麗華のスマホが鳴る。画面に、唯のL

INEアカウントが表示されている。

麗華「唯？」

麗華、着信に応答。

唯の声「大変なの。神子をうちに泊めてたん

だけど、いなくなっちゃって」

麗華「帰っただけなんじゃないの？」

唯の声「神子ならよく私にくっついてたでしょ。帰れなんて言っていないし、だったらおかしいんじゃない」

麗華「わかった。じゃあ通報しとけば？」

○アパート香椎宅・寝室（朝）

唯、通話を切られる。

唯「切られた……はあ。麗華ってきっちりしててけっこうなんでもできたから、とろい神子を、よく思っていないところあったからなあ……地雷系になってまで友達のために金稼ぐなんて、友達想いが変な方向に行ってる」

百合花「友達思い、ね」

唯「どうかした？」

○佐々木宅・居間（朝）

麗華「……ちよっと冷たかったかな」

麗華、スマホを見つめる。

麗華「佐藤先輩に連絡しておくか」

麗華、スマホから電話をかける。

タケシの声「どうした？」

麗華「（早口めで）実は、友達が攫われたかもしれない。名前は時乃神子30歳。地雷系女子でパパ活してる。30なのに20前半くらい顔がいいからそれで攫われたかも」

タケシの声「お、おう。早口だな。そんなに心配なのか？」

麗華「な、そんなわけないでしょう」

タケシの声「ひどいな」

麗華「いや、そういうことではなくて……つて、ああもう心配です！ 友達を見つけてください！」

タケシの声「見つけてください、じゃないだろう」

麗華「あ。えっと、見つけましょう！」

タケシの声「おう」

通話終了。

麗華「はあ。まったく、迷惑かけて。昔から、
とろくて人のあとついてくるだけだったと
こ変わってない。でも……」

麗華、スワイプして神子とのトークル
ームを開く。友達っぽい楽しそうなメ
ッセージがある。

麗華「心配、なのかなあ」

○（回想）山道

4人組とその親たち、山道をのぼって
いる。

神子、遅れている。苦しそうに息を荒
くしている。

麗華「神子、遅い。早くしないとみんな空腹
で倒れちゃう。早くして」

麗華、後ろの神子を見る。

百合花「まあま、せっかくの唯の18ハピバ
遠足なんだし、楽しもっ！」

百合花、麗華に笑顔を向けながら歩い

ている。

麗華「っ」

麗華、百合花から視線を逸らして頬を
赤らめる。

（回想終わり）

○佐々木宅・居間（朝）

麗華「あの時の百合花が優しくて、かわいく
て、好きになった。恋を自覚した……私も、
もつと優しくなるべきだなあ」

麗華、しょんぼりとする。

※ ※ ※

（フラッシュ）

居酒屋で、神子に怒鳴る麗華。

※ ※ ※

麗華「あ……」

麗華、はつとした顔になる。

麗華「私、神子にパパ活してるのを怒った。
心配だったから……そっか。友達だからか。
今更何言ってるんだろう。唯が、4人は一

生友達って言ったのに」

※ ※ ※

（フラッシュ）

神子にストラップを渡す麗華。

※ ※ ※

麗華「なるほど。心配なわけだ。友達……か」

○交番・中（朝）

唯、事情説明中。

唯「ってわけなんです……」

交番警官「といってもねえ……それは帰った
だけに聞こえるけどねえ。地雷系なら、パ
パ活でもしてるんじゃないのか？」

唯。言葉に詰まる。

○大通り（朝）

唯「だめだ、友達がパパ活なんて言えない……
……けど絶対パパ活な気がする……麗華なら
知ってる刑事だから調べてくれてもいいの
に……」

唯、いつもより暗い顔になっている。

百合花「まあ。変わってなかったしねえ。神子かわいかったから、攫われたりするかも。パパ活やってたらなおさら？」

唯M「？」

唯、胸を押さえる。

唯M「なんだろ……」

唯のスマホから着信音が鳴る。

唯、応答する。

唯「麗華？」

○佐々木宅・居間（朝）

麗華、スマホを耳元にあてており、

麗華「全部警察の先輩に言ったから心配しないで。パパ活のことと言ったけど殺されるよりマシ。わかった？」

と、早口でまくしたてる。

唯の声「よかった」

麗華「怒ってないの？」

唯の声「なにが？」

麗華「いや、私ことあるごとに神子に何か言
ってたじゃん」

唯の声「それは、麗華が神子を心配してるか
らだよ」

麗華「そう、なの？」

唯の声「うん。麗華は優しいって私たちみんなわかってるから、もし何か思いつめてるなら、私たちを頼って。麗華焦ると早口になるから」

麗華「唯……」

麗華の頬を、涙が伝う。

唯の声「って、焦ると早口はみんなそうか。」

麗華は冷静クールだから、焦ると目立つんだ。昨日の飲み会で思ったけど、私たちのことになるとすぐ焦るんだね」

麗華「わかったから……唯も、気を付けて。ボランテアばっかしてると倒れるよ」

麗華、泣きながらにこっと笑う。

通話を切り、涙を拭く。

○丸井組ビル・2階（朝）

丸井太郎（55）、縛られている神子をねっとりとした視線で眺めている。その横に中島タクヤ（40）が立っている。

太郎「この写真、お前だよな？」

太郎、スマホの画像を見せる。

画面に。神子がハゲのおじさんにフェラしている画像が映っている。

神子「あ……と、撮られて、た？ そんな、ホテルに、カメラなんてあるの？」

神子、震えながら顔面蒼白になる。胸のストラップをぎゅっと握りしめる。

太郎「コネってやつさ。知り合いに議員がいてな。この程度の犯罪は揉み消せるんだ」

神子「あ、あ、あ……」

神子、うつむいて泣き始める。

太郎「かわいいがどうせ傷ものなんだ。試しにもかまわねえよなあ……？」

太郎、舌なめずりして神子に迫る。

○大通り（夕方）

大通りを走っているパトカー。

麗華、ハンドルを指でトントン叩きながらパトカーを運転している。

麗華「突撃捜査の令状取るのに時間かかった！
くそっ！」

刑事「丸井組は脅威と認知されているので、
取れてラッキーでは？」

麗華「ラッキーじゃない！ 当然の結果！
とにかく！、佐藤先輩も向かってるはず！
行くよ！」

刑事「はい！」

麗華「神子……死なないでよ！」

麗華、鋭い視線で前を見る。

○住宅街・丸井組ビル付近（夕方）

パトカーを離れたところに停め、影から丸井組ビルの様子を伺っている。

特殊部隊が、盾とライフルで武装して

いる。

タケシ「おう、来たか」

麗華「先輩！」

タケシ「丸井組、麻薬や人身売買などをやっているが、なかなかやつらをしょっぴけていない……」

麗華「背後に何者かがいるのでしようね……」
タケシ「奴らに気づかれない方向からいくぞ」

○丸井組ビル・2階

ヤクザA、勢いよく扉を開けて入室。

ヤクザA「組長！ サツです！」

太郎「何？」

タクヤ「どうしますか？」

太郎「迎え撃て！」

太郎の掛け声を皮切りに、ヤクザたち銃を手に取る。

特殊部隊たち、盾を持って入ってくる。

神子、麗華の姿を見つける。

神子「麗華……」

麗華「神子、もう大丈夫だから」

タケシ「GO！」

タケシと麗華、拳銃で神子の近くのヤクザを撃つ。

麗華、銃弾をかくぐりながら神子のもとに素早く移動し覆いかぶさる。

ヤクザB「くそっ！」

ヤクザB、麗華に銃を向ける。

麗華「はあっ！」

麗華、神子に覆いかぶさりながら振り向きざまに発砲。ヤクザB、倒れる。

ヤクザ、太郎以外全員倒れる。

太郎「くそ！」

麗華「させるか！」

太郎、麗華の発砲で銃を落とす。

タケシ「確保！」

タケシ、太郎に覆いかぶさる。

麗華「神子！ もう大丈夫だからね！」

麗華、神子を抱きしめる。

神子「あ、ありがと……うわああああん！」

神子、泣きじゃくる。

○丸井組ビル前（夕方）

ヤクザたち、警察たちにパトカーに乗せられる。

タケシ「周りにも残りがいないか搜索しろ！」

警官たち「は！」

警官たち、ビル周辺に走っていく。

タケシ「ふう。令状が出てよかった」

麗華「丸井組はここら地域にとっては脅威で

したからね……」

神子「れ、麗華……」

神子、ふるふる震えている。

麗華「神子。もう大丈夫」

麗華、神子をなでる。

タケシ「だが、今までいろいろ揉み消されて

きたから、安心はしきれない」

タケシ、麗華に耳打ちする。

麗華「ええ」

○高校・中庭（夕方）

唯、しゃがんで花壇の手入れをしながら通話中。百合花、唯にくつついていく。

麗華の声「神子には、精神状態を考慮してこっちの方でカウンセリング受けさせるから」

唯「そうなんだ。ありがとう……麗華」

麗華の声「うん」

通話が切れる。

唯、じょうろで花壇に水をまく。

サッカー部員A「あ、いたぜ！」

サッカー部員B「お！　握手してもらおうぜ

！」

サッカー部員たちが唯のもとへ駆け寄ってくる。

百合花、握手の動作をしていく。

名木野恭平（50）「おい、花壇の世話して

くれてるんだからあまり迷惑かけるなよー

！　さっさと着替えて帰宅しろー！」

恭平、部員たちに向かって叫ぶ。部員

たち、唯と百合花のもとから立ち去る。

恭平「久しぶりだな、少し話すか」

恭平、唯のもとに歩いてくる。

唯「まだいたんですか、すごいですね」

恭平「転勤とかはしてるさ。今たまたまここに戻ってきただけで」

唯「そうなんですね……」

恭平「目にクマできてるけど大丈夫か。香椎、俺のクラスだった頃から、誰もやりたがらないから学級委員と風紀の兼任とかしてただろ。」

唯「……大丈夫です。あと、麗華は率先して立候補してましたよ。どっちも2人だったから、どっちも私と麗華で」

恭平「そういえばそうだったな」

恭平、少し笑う。

唯、土を手入れしている。

恭平「俺には、大事な弟がいたんだ」

唯「ああ、なんか言っていましたね」

恭平「けど、逮捕されてな」

唯「え、それは初耳です」

唯、立ち上がる。

恭平「卒業ちようどくらいの時期だったからな。あんまり言いづらいんだが……未成年に手を出したんだ」

百合花「せんせ、それ年齢差すごくない？

せんせの弟でしょ？」

恭平「だから有罪になった。未成年のほうが年齢を偽ってたから悪くないと弟は主張したんだが、未成年を襲ったのは卑劣だってんで、裁判で勝てるわけがなかった」

恭平、寂しそうな顔になる。

恭平「弟にも下心があっただろうが、俺は弟が受けた罪は不当だと思ってる。それと……逢沢、苦勞しただろう。まだ犯人は見つかってないんだろ？」

百合花「うちは大丈夫だよ、せんせ。唯がいるし、それにうちを殺した犯人もきつと麗華が捕まえてくれるから！」

恭平「佐々木らしいな」

唯「あ、LINE交換してください」

恭平「妻がいるんだけど」

唯「そうじゃなくて、部員の寿司の好み聞いといてください。近いうちパーティーでも
どうですか。育ち盛りでしょう」

恭平「そうか、悪いな」

2人、LINE交換。

恭平「気をつけて帰れよ」

百合花「はーい！」

唯と百合花、歩き出す。

百合花、恭平に手を振る。

恭平「まさか、まだ一緒にいたとはな」

○カウンセリングルーム（夜）

神子とカウンセラーが、椅子に座って

机越しに向かい合っている。

カウンセラー「大丈夫？ 怖くなかった？」

神子「う、うん」

カウンセラー「問題なさそうね」

○電車（朝）

唯、満員電車の椅子に座っている。

唯「はあ……あのあと神子は逮捕とかされずに帰されたって聞いたけど、結局いつもの日常に元通りだ……だる。眠い……朝早い、動きたくない……課長とか最悪……ヒラでよかったのに……」

唯、だるそうな顔になっている。百合

花、唯にくつついている。

百合花「唯がみんな助けるとこ、かつこいいよ」

唯「人助けは、余裕あるからできるんじゃない……」

百合花「唯の性格なら、余裕なくてもやってくる。そういうとこ、かつこよくてすきだな」

唯「あつそ……」

○会社、オフィス（朝）

唯、扉を開けてオフィスに入室し、

唯「おはようございまーす……」

気だるげな挨拶をする。

唯 M「百合花の未練見つける時間が必要なのに……」

唯、とぼとぼと課長の席に座る。

仕事が始まってしばらくして。

サラリーマン B「あの、ここを」

唯「うんうん、えっと」

唯、渡された資料を見る。

唯「いい感じだと思う、このまま続けて」

サラリーマン C「すみません、来てください

！

唯「なに？」

サラリーマン C「ここなんですけど……」

それからしばらく、部下のサポートを

主に仕事する唯。

○アパート香椎宅・玄関（夜）

玄関の扉を開け、中に入る。

唯「ただいま……」

○同・居間（夜）

唯、ソファに倒れ込む。

百合花「唯……唯！？　唯っ！」

百合花、焦って唯をゆすろうとするが
体が透ける。

唯の体から聞こえる寝息。

百合花「寝てるだけか……唯、お疲れ様」

百合花、唯をやさしくなでる。

百合花「晩飯……は会社で食べてたね。唯、
ほんつとすごいね……」

○名木野宅・居間

こども2人を持つ名木野家族、晩ごは
ん中。食卓に色々なおかずが並んでい
る。

名木野航大（10）「パパ、あしたね、おと

もだちのどこ遊びに行く！」

恭平「そうか、いってらっしゃい」

恭平、料理を口に運ぶ。

名木野濤（8）「日曜はパパと遊ぶ！」

恭平「そうかそうか」

恭平、子供たちの頭をなでる。

恭平「そっちはどうだ？」

名木野明日香（４４）「最近、課長が変わっ

たの」

恭平「へえ」

明日香「香椎唯って人なんだけど」

恭平「まじか……俺の教え子だ。じゃあ、圭

と陽太郎と同じ会社だったってことか」

明日香「懐かしいわ。陽太郎があなたを紹介

してくれたんだよね」

恭平「ああ。圭にも見せてやりたかった」

○同・居間（朝）

T「土曜日」

時計が９時半を示している。

唯「また寝落ちか……とりあえず朝食べない

と……仕事ないと起きるのおっそいなあ」

唯、トーストを作る。それを食べなが

ら寿司を作っている。

百合花「なに作ってるの？」

唯「寿司の盛り合わせ。サッカー部に差し入れ。名木野先生には恩があるし」

百合花「なんでわざわざ手作りを？」

唯「そのために、先生から部員の寿司の好み聞いた。あと、なんか手作りしたかった」

百合花「そっか。ちよつとつまみ食いしたら？」

唯「サッカー部に……」

百合花「食べて」

百合花、唯に真顔を向ける。

唯「え、百合花は食べれな」

百合花「いいから。2つね」

百合花。少し怒ったような表情を向ける。

唯「わ、わかったよ……」

唯、寿司のたまごと炙りサーモンチーズを1つ口に放り込む。

百合花「うんうん、それでよし！ 唯ってほんと、たまご好きだねー！」

百合花、にこにこ顔になって唯の頭を
なでなでする。

唯「部員の数は数えてないから、比率は大体。
さすがに細かく数えんのめんどくさいから」
百合花「差し入れ作るのも充分……いや、そ
れ言うのは野暮かな」

唯「バーベキューみたいにテキトーにとって
もらうシステムにする」

○高校・校門（朝）

女子生徒3人と男子生徒2人、箱を持
って立っている。

唯「はい、これ」

唯、募金箱に万札を入れる。

女子生徒A「直接どこかに募金しないんです
か？」

唯「ううん。あなたたちの行動に応えたいと
思ったから。その方が、あなたたちも褒め
られる」

女子生徒A「あ、ありがとうございます……」

○高校・グラウンド（朝）

グラウンドで、サッカー部が練習中。

百合花「唯、前より顔色悪くなってない？」

唯「そう？ 別に、普通だと、思うけど」

恭平「わざわざ悪いな」

唯「いいんです。先生は恩師ですから……みんながんばってますね」

サッカー部の練習を眺める唯。

○同・教室

恭平「香椎さんが、寿司を作ってくださいました。」

みんな感謝して頂きますを言いなさい」

部員たち「いただきますーす！」

部員A「うめえー！ すげー！」

部員B「これ俺の！」

部員たち、感嘆の声を漏らしながら寿

司を食べる。

唯「よかった……」

唯、しんみりとした表情になる。

恭平「香椎も食べたら？」

唯「いえ、昼は友達と……」

唯、百合花の厳しそうな表情に気づく。

唯「た、食べます」

唯と恭平、席について寿司を食べ始める。

恭平「ところで、時乃は何してるんだ？」

唯「元気にしてますよ」

恭平「そうか……」

恭平、寿司をじっと見つめる。

唯「それじゃ。みんなと会う約束があるので」

唯と百合花、教室を出る。

○ファミレス前

唯、百合花、神子、麗華、ファミレス

前に集まっている。

唯、いつになくげっそりしている。

唯「みんな集まってくれてありがとう。神子、

大丈夫だった？」

神子「うん。大丈夫、だよ」

麗華「百合花が自分を殺した犯人を探したい
って言ったんだって？」

唯「うん。どうしてもって。それで、みんな
と一緒にいる時間を1分1秒でも大事にし
たいって。だから、みんなで探すことにな
ったの」

麗華M「やっぱり、犯人を見つけると成仏し
ちゃう……その前に、百合花が幽霊でもい
いから告白したい……けど、そんなことし
たら、関係が壊れちゃう……」

百合花「どうしたの？ 何かなやみごと？」
百合花、にこにこ顔で麗華の顔を覗き
込む。

麗華「ううん、なんでも……百合花、ほんと
優しいね。百合花のためにも、探してやり
ますか」

神子「うん……」
百合花「みんな、ほんとにうちの未練は気に
しないでね！」

唯「うん……」

麗華「でも、寂しいよ……」

麗華、うつむく。

○ファミレス・中

唯たち、メニュー表を見ている。

百合花「麗華がそんな顔見せるなんて珍しく」

麗華「だって、百合花は、その……」

麗華、口ごもる。

百合花「ふんふん。それで？」

百合花、にこにこしながら麗華を見る。

麗華「っ、と、友達、だもん……」

恥ずかしそうに声を絞り出す麗華。

百合花「えへへっ！」

神子「素直……だね」

唯「麗華がデレるところってあんま見ないよ

ねっ」

麗華「ちゃ、茶化さないでっ！ 店員呼ぶよ

っ！」

ピンポン音が鳴り響く。

店員「ご注文をお伺いします」

唯「これ3つください。あと、デザートにグランドチョコレートパフェを1つ」

店員、メモを取ってからその場を去る。

唯「麗華、そっち何か情報出た？」

麗華「情報って？」

唯「ほら、私たちに教えてくれたじゃん。丸井組が神子を、って」

麗華「そういうのはあんまり外部に漏らせないから。それに……」

唯「それに？」

麗華「私……免職になったから。新しい情報に期待しないで」

唯「免職……」

神子「めんしょく、って、どういうこと？」

唯「警察のことよく知らないけど、たぶんクビになったってこと。なんで」

麗華「焦ってて、GPS捜査の令状を取り忘れた。つまり、許可の出ない捜査をしたってこと」

神子「どうして、そんな。麗華、らしくない

よ……」

神子、心配そうに麗華を見つめるが、

麗華「神子が！ 神子がとろいから心配だったの！ それにつけてたの！」

麗華、神子の胸のリボンについたストラップを指さす。

○（回想）墓地（夕方）

麗華「あ、神子。これ」

麗華、神子に小さなストラップを渡す。

麗華「胸のリボンにつけたらお似合いだよ。

取れないようにしっかりとつけてね」

神子「……あ、ありがとう……！」

麗華 M 「GPSを取り付けた……これで、神子に何かあっても場所がわかる」

（回想終わり）

○ファミレス・中

麗華「神子ずっと昔からとろかったよね！？」

だからそれつけないと心配だった！ 早

く助けたいって一心で、許可取らなくて私はクビになった！」

叫ぶ麗華。

麗華のほうを向く客たち。すぐに視線を戻す。

神子「ご、ごめんね……こんな、こんな悪い友達なんか、いないよね……」

神子、目をうるませながらうつむく。

麗華「ばか！」

神子「ひっ」

麗華怒鳴る。神子、びくつとする。

麗華「友達が心配だったって言ってんの！

ほんとと神子ってとろいよね！　そういうところが嫌いだった！」

神子「ごめんね、ごめんね……」

神子、ぼろぼろと涙を流す。

麗華「ごめん、帰る」

麗華、席を立つ。

自動ドアが開く。麗華、店の外に出て歩き去る。

○大通り

麗華「っ……ううっ！」

麗華、目を腕で覆いながら歯を食いしばって泣いている。

麗華「百合花にあんな姿さらしちゃった……嫌われた！もう百合花にも神子にも会えない！」

○ファミレス・中

百合花「神子、気にしないで」

百合花、神子を優しくなでる。

百合花「麗華、クールだけど大事な友達のことになったらああなるからねえ。すごい優しいけど、それを表に出したくないっばい」

神子「やさしい。けど、あたしよりも、不器用……」

唯「麗華……」

○佐々木宅・居間

麗華「びあああああああ！」

麗華、ソファに突っ伏して大泣きして
いる。

麗華「あああああああああ！ 百合花あ！

神子！ 唯！」

○ファミレス前

唯「麗華……思いつめてた。私たちのことで」

神子「行こう……」

唯「うんうん。あんな麗華、見捨てられない
から」

百合花「お！ 見捨てられない！ 唯の本領
発揮だね！」

○佐々木宅・居間

麗華「ううつ、百合花あ……」

インターホンが鳴る。

麗華、起き上がって玄関に向かう。

○佐々木宅前

3人、心配そうな表情で佐々木宅前に立っている。

玄関扉が開く。麗華が家から出てくる。

麗華「え、みんな」

神子「ごめんね、麗華、しんどくなるまで頑張ってるのに気づかなくて……あたしのために、ありがとう。だから、泣かないで」

神子、涙ながらに訴える。

唯「麗華。麗華は、自分のことよりも神子のことを第一に考えてくれた。その気持ちがある、すっごい嬉しいよ」

百合花「そそ！ だからさ、スマイルなつてよ」

麗華「百合花は私の……気づいてないの？」

麗華の頬を涙が伝う。

百合花「え？」

麗華「成仏のこと言われて気づいた後……私、百合花が成仏するのが嫌で、犯人の捜査にためらってたの。だから、刑事としてそれ

がよくないと思って……令状忘れてるのに
気づいた時、ほっとしちゃったの……」

百合花「麗華……どうしてそこまで」

麗華「気づいてなかったんだね……」

麗華、百合花の手を取ろうとする。

麗華「私……百合花のことが、ずっと好きだったの……大好きだったの！ それなのに死んじゃって、どうすればいいかわかんなかったの！」

3人「え」

3人、驚き呆然とする。

麗華「ごめんね、こんな告白になっちゃって……」

百合花「麗華」

麗華「百合花……みんな……私、どうすればいいの？」

百合花「ごめんね、その気持ちにこたえてあげられなくて。でも、ずうっと、3人とも大好きだから……だから、もう泣かないでよ……」

百合花、麗華に抱きつく動作をして涙を流す。唯と神子、それを見てつられて涙を流す。

麗華「百合花ああああ！」

麗華、大声をあげて泣き叫ぶ。

百合花「ごめん、ごめんね……」

唯「2人とも……」

唯、涙をぬぐって2人に触れる。

麗華「う、ひつく。ごめん……見つけよう。」

百合花を殺した犯人

百合花「うん、お願い」

麗華「にしても百合花、葛藤ないね……」

麗華、袖で涙を拭く。

百合花「そう？」

麗華「なんか、成仏が怖くない感じ」

百合花「あ、そ、それはね……」

唯「なんか、動揺してる？」

神子「それ、思った」

百合花「なな、何言ってるの？」

麗華「まあいいけど」

○アパート香椎宅・夜

唯「……」

唯、ぼーっとしている。

百合花「おーい」

唯、ぼーっとしている。

百合花「おーい！」

唯、ぼーっとしている。胸を押さえて

呼吸を荒くしている。

百合花「こら！ 聞け！」

唯「あ、ごめん」

百合花「もー、怖いことしないで」

唯「大丈夫」

○電車（朝）

唯、胸を押さえている。

○会社・オフィス（朝）

唯「おはようございまーす……」

唯、胸を押さえている。

浅野陽太郎（48）「大丈夫ですか？」

唯「え、だいじょう、ぶ」

陽太郎「怖いです。病院行きますよ」

唯「え、みんなが」

陽太郎「がんばりすぎなんですって香椎さん。

おかげで僕より出世してますし」

唯「それは、どうも」

陽太郎「とにかく！ 行きますよ！」

陽太郎、苦しそうな唯に肩を貸す。

○車の中（朝）

陽太郎、唯を車に乗せる。自分も車に

乗り、ドアを閉め、車を発進させる。

唯、ゆっくりと目を閉じる。

百合花「……寝ただけか」

○どこかの倉庫・中

唯、ゆっくりと目を覚ます。

唯「あれ、ここ、は」

唯、縄で縛られている。

百合花「唯！ 大変！」

唯「ゆり、か」

百合花「あの人、誘拐犯だった！」

唯「え……浅野さん、が？」

百合花「ほら見て！」

百合花が示した先に、陽太郎と恭平がいる。

陽太郎「香椎さん、すみません。恭平には恩があつて、恭平の頼みで拉致させてもらいました。」

唯「え、名木野先生……はあ、はあ。なん、で」

恭平「悪いな、香椎。俺は、弟の復習をしなきゃならないんだ」

恭平、怒りを含んだ真顔になっている。

恭平「香椎には、ある人物をおびき出す餌になつてもらう」

唯「え、誰の……」

恭平「俺の話を覚えてるか。弟は、年齢を偽った未成年と行為に及んで逮捕されたって」

唯「それがどうしたんですか、はあ、はあ」

恭平「思い当たらないか？ 香椎の身近に、

援助交際……パパ活をしている人物がいる
ことを」

唯「ま、まさ、か……」

恭平「そうだ。そして、弟からそいつの電話
番号を教えてもらっている」

恭平、スマホを取り出す。

○アパート時乃宅・居間

神子のスマホから着信音が鳴る。

神子「はい、どなたでしょうか」

恭平の声「時乃。香椎を連れ去った。返して
ほしければ、今からいう場所に来い。1人
でだ」

神子「え、誰なの」

恭平の声「俺だよ、名木野恭平」

神子「え、先生……？」

恭平の声「従わないと、香椎の命はない。な
ぜかしんどそうだから、早く来た方がいい。

場所は、○○倉庫だ」

○どこかの倉庫・中

恭平「お前たち仲良かったよなあ」

唯「や、やめ、て……」

恭平「黙れ！　俺は、弟が誰より大事なんだ
！」

○（回想）商店街

恭平（8）「圭！　見ろ！　レアカード当た
ったぜ！」

恭平と名木野圭（6）、店の前でカー
ドが入った袋を開封している。

圭「すっげー！」

恭平「帰ってバトルしようぜ！」

○名木野宅・居間

恭平「よっしゃ！　勝ったぜ！」

圭「くっそ！　もっかいだ」

恭平「圭は俺に勝てないよーだ」

圭「くっそ！」

恭平「……ははっ」

圭「はっはははは！ お兄ちゃんとカードゲームするの楽しいな！」

2人、笑いあう。

○名木野宅・居間

大人になった恭平。

恭平「な、圭が逮捕された？」

（回想終わり）

○どこかの倉庫・中

恭平「そんな弟が、あいつのちよつとした嘘で地獄に落とされた！ 面会に行っても、ああとかおおとかしか答えない！ 弟はいやつだ！ きっと、成人じゃなかったら手を出さなかったし、純粹な気持ちだった！」

唯「そんな……先生……」

百合花「神子、そこまでして金を……」

恭平「どうだ！ これでも俺が悪いか？」

唯「悪いですよ！」

唯、おもいつきり叫ぶ。

唯「たしかにお気の毒です……けど、けど！

こんなこと許されなです！ ごほっ！」

唯、せき込む。

百合花「唯！」

唯「大丈夫、心配しないで……」

恭平「学校以外だと見えないが、逢沢も来てるんだな」

唯「なんでそんなに覚えてくれてるのに、こんなひどいことを？」

恭平「弟がどれだけ大事か！ お前たちにはわからない！」

唯「だったら、友達が大事な私の気持ちもわかってくださいよ！」

恭平「うるさい！ だま」

神子「先生やめて！」

恭平、唯、百合花、陽太郎が振り向く。

その方向に、神子が立っている。

神子「ごめんなさい、どうしてもお金が欲しくて……」

恭平「ふざけるな！」

恭平、大きく叫ぶ。包丁を取り出し、

神子に向ける。

神子「ごめんなさい、ごめんなさい……」

神子、土下座する。

恭平「そんなちんけな謝罪で弟が帰ってくると思うな！」

神子「あたしにも大事な人が……」

恭平「うるせえ！」

神子「だから、大事な人がいるのにこんなこととして、本当にごめんなさい……」

涙が地面に落ち、地面が濡れる。

神子「ごめんなさい、ごめんなさい……ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい……」

神子、土下座の姿勢を崩さない。

○同・外周

物陰に隠れている何者か。

○同・中

神子「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい……」

唯「神子……なんでそこまでして私のために金を……あれ、そういえば、私のためについて言ってたっけ？」

神子「うん……」

神子、立ち上がる。

唯「え、えっと……」

神子「唯に嫌われちゃって、かなしいなあ。好きだったのに……」

○（回想）小学校・教室

神子M「あたしは昔からとろかった。あと、顔がかわいって理由で、いじめられた」

神子（12）、女子たちにいじめられている。

唯（12）「こら！ やめろ！」

唯、叫ぶ。

女子たち、逃げていく。

唯「神子、大丈夫？」

神子M「かっこいい……」

（回想終わり）

○どこかの倉庫・中

唯「神子……」

百合花、胸に手を当てる。

恭平「ほんと時乃はずるいな！俺が香椎に
恩があることも知ってて、香椎が悲しむよ
うに、香椎が好きって出まかせを言ったん
だろ！」

神子「違う！ほんとのほんとに好きだもん
！」

恭平「……まじか。まあやたら仲良かった気
はするが」

神子「ごめんね、唯。とろい私には、パパ活
しかできなかった……気持ちがね、抑えら
れなくて、それで嘘ついちゃった。唯ね、

ずっとね、みんなのためにがんばってたからね、疲れてるんじゃないかって。だから、あたしがお金をね、稼いであげたかったの……」

唯「そうだったんだ……先生、ごほっ！ 先生も、大事な人を大事に思う気持ちがありますよね？ はあっ、はあ！ どうか……神子を、許して、やって、くれ、ませんか……」

唯、胸を両手でぎゅっと掴む。徐々に息が荒くなってきた。

恭平「俺は……弟が大事だ。そこは譲れない。だが、サッカー部顧問として、香椎に恩がある。これは本心だ。だから」

恭平、唯の縄をほどく。

太郎「はいそこまで」

倉庫に、丸井太郎とヤクザ一行が入ってくる。

一同、丸井太郎の方に向く。

神子「丸井さん……来てくれたんだ。事務所

への連絡、気づいてくれたんだ」

唯「え、神子……嘘、でしょ？」

神子「唯……やっぱりあたし、お金がほしい」

唯「なんで！　嘘だって言つてよ！　いや、

そんなことよりなんでヤクザがここに」

太郎「知り合いの議員が出してくれたのさ。

武器は没収されちまったがなあ。だから再び、お前を攫いに来た。それと、時乃神子から聞かれたんだが……逢沢百合花を殺したのは俺だ。最近ニュースになったやつもなあ。ま、もみ消してもらってるから俺だつてばれることはないが」

太郎、神子をじーっと眺めて舌なめずりをする。

唯「お前……！」

百合花「こ、こいつが……」

唯と百合花、怒りのまなざしを太郎に向ける。

太郎「ありがとうよ、乱交パーティーに誘ってくれてよ。おあずけくらつてたからなあ。

楽しませてくれや……」

太郎、ニヤリと笑う。

恭平と唯、神子の前に立つ。

恭平「時乃は、大事な、俺の、生徒だ……！」

唯「神子は、私が……守る。ヤクザなんとかと、

パパ活、させない……！」

太郎「お前らは死ね——」

鳴り響く銃声。

太郎「ぎゃあっ！」

太郎の肩から血が飛び散る。

唯が振り向くと、視界に銃を持っていた
る私服の麗華の姿が映る。

倉庫に、警官たちが入ってくる。

麗華「神子！ 大丈夫だった？」

タケシ「捕らえろ！」

警官たち、警棒でヤクザと応戦。次々
とヤクザを捕らえていく。

太郎「く、くっそおおお！」

太郎、手錠をされた状態で叫ぶ。

タケシ、恭平に手錠をかける。

神子「また、ひっかかったね。こんどは、盗聴器を自分につけてるんだよ」

太郎「きつさまあつ！」

太郎、吠える。

麗華、神子のもとへ早歩き。

麗華「こんのバカ！」

神子「いだっっ」

麗華、神子に平手打ちする。

唯「ちょ、ちょっとなにしてるの」

麗華「神子、自分をおとりにしてこいつらをここにおびきよせたの！」

○（回想）佐々木宅・居間

麗華、通話中。

麗華「え、唯が名木野先生に拉致られた？」

神子の声「うん。それで、今から丸井組に電

話かけて○○倉庫におびきだそうと思うの。

麗華たちは、先に倉庫の近くに行つて隠れてて

○どこかの倉庫・外周

物陰に隠れて入口を見ている麗華、タ
ケシ、警官たち。

（回想終わり）

○同・中

唯「神子！ 危ないよ！」

神子「でも、こいつが百合花を殺したって言
ってた。だから、捕まえなきゃって」

麗華「バカつつつつ！」

麗華、叫ぶ。

麗華「犯罪がもみ消される丸井太郎を捕まえ
る千載一遇のチャンスだったからそれにの
っかっただけだから！」

神子「う、う。、ふえええええ。ごめんなさ

い　い　い　い　い」

神子、泣き出す。

麗華「もう……神子が無事で、ほんとよかつ
た！」

麗華、神子を抱きしめる。神子、わん

わん泣いている。

○留置所・廊下

T「数日後」

唯 N「あのあと、丸井組はちゃんと逮捕された。そして、私たちは先生に会いに来ている」

唯たち、廊下を歩いている。

○留置所・面会所

灰色の服を来た恭平、唯たち4人と面会中。

恭平「そこにいるのか？」

唯「はい。4人います」

神子「ごめんなさい、先生」

恭平「もういい。謝らなくて。それより、盗聴器使ってたみたいだが、佐々木大丈夫か？」

麗華「大丈夫じゃないですね……私が可能な限りかぶったんで先輩は無事なんです、

私はもう二度と刑事にはなれないでしょう。
でも、目的は果たしました」

恭平「よかったな」

○学校・中庭

麗華「で、百合花。成仏してないけど」

3人、百合花を見つめる。

百合花「うん。うちの未練ね、犯人見つける
ことじゃないの」

麗華「はああああ！？」

百合花「気にせず見つけてって言ったでしょ」

神子「じゃ、じゃあ。なんで」

百合花「唯」

唯「なに」

唯、座る。げっそりとしている。

百合花「私ね……」

百合花、もじもじしている。

唯「え……」

唯と百合花、頬を赤くする。

麗華「まじ？」

神子「え、ええええ」

麗華と神子、驚く。

麗華「だから、ずっと唯についてたんだ」

百合花「言えなかったことが未練だから、言えないんだ」

唯「そ、そうだったんだ……う、嬉しいなあ……私も、ずっと、好きだったから、百合花に、振り向いて、もらうために、がんば、た」

唯、胸を掴みながら仰向けに倒れる

百合花「唯？」

唯「ごめ……ん、ね」

百合花「嘘だ……」

神子「え、なんで」

麗華「明らかに過労だよ、これ」

百合花「そんな」

唯「つ、疲れた……百合花に、振り向いても
らいたかった……でも、未練がそうだから、
ずっと振り向いてもらえなかったんだ……」

百合花「やだ、やだ、やだよ。うちのせいで

「こんな！」

百合花、麗華、神子、ぼろぼろと涙を流す。

唯「ううん。いいの。私は、私のやりたいように生きれた。未練はないよ。だから……謝らないで」

百合花「嫌だ！ 未練がないなんて言わないで！」

神子「まだまだいっぱい遊ぼうよ」

唯「もう……遊んだよ。みんな、いっぱい、私にくれたから」

唯、百合花に手を伸ばす。

唯「百合花……だい、すき……」

唯の伸ばした腕が、力なく地面に落ちる。

百合花「唯？ 唯？」

麗華「嘘、だ」

神子「信じない信じない」

3人、笑顔のまま動かなくなった唯を見つめ、

3人「あああああああ！」

声をあげて泣く。

○墓地

T「1年後」

唯の墓の前。3人が手をあわせている。

麗華「まさか、百合花がまだ見えるなんて」

百合花「唯がいなくなったから、次の場所を

……いや、きっと唯がのこしてくれたんだよ。みんなに仲良くしてほしいって」

神子「そう、だね」

麗華「さてと。いつもの居酒屋でも行こっか

……4人で」

3人、涙を含んだ顔でにこっと笑う。